再訪ミュー

100年に及ぶ

ド車（HV）や電気自動車の登場など、車は大きな転換期を迎えている。こうした時こそ改めて車の歴史を振り返ってみるのも意味があるのではないか。そこで4回にわたってトヨタ博物館の全容を紹介する。

◇

トヨタ博物館は「ガソリン自動車が誕生してから現代にいたるまでの歴史を、当時の文化や暮らしぶりとともに展示する」をキッズ・ガレージ」などがある。

収蔵車両は、ガソリン自動車の第一号車と言われる独ベンツの「パテント・モトールヴァーゲン」（レプリカ）から故ルーズベルト米大統領の専用車「パッカードトゥエルブ」、日本のモータリゼーションの幕開けを告げたトヨタの「カローラKE10型」、そ

シンボルゾーンに飾られたトヨダＡＡ型乗用車

1930年代までの欧米車を中心に展示。3階は「日本人による自動車生産」をテーマに、トヨタ初の生産型乗用車の「トヨダＡＡ型乗用車」や現在の日産自動車の前身である自動車製造株式会社の「ダットサン16型セダン」などから始まる国産車の歴史を見ることができる。また新館の2階では、国産車の誕生からプリウスに至るまでの歩みを、当時の文化や暮らしぶりとともに展示する。博物館本館の入り口を入

が1階ロビーに置かれているトヨダＡＡ型乗用車だ。同車は、トヨタ自動車の前身である豊田自動織機製作所（当時）の自動車部が1936年に完成させた乗用車。博物館の開館にあたりトヨタではこの車の行方を探したものついに発見することができず、限られた資料と開発当時の関係者の証言などから内装に至るまでの忠実に再現した。博物館本館の入り口を入

館のように動態保存を基本としているところは多くはない。動態保存はオープン当初からの基本ポリシーだ。このため、博物館は館内に維持するために必要な整備機器を置いた設備を持つほか、専門業者とともにリペア作業などを常に行っている。

1989年の開館から約20年。2011年3月末までの総入場者数は490万人あまり。最近の5年間は20万人か25万人で推移しており、名古屋の観光スポットのひとつとして定着しているようだ。また来場者は小学生や中、高生の団体のほか、家族連れの姿もよく見られる。

〈トヨタ博物館へのアクセス〉車では東名高速道路の日進ジャンクションを経由して名古屋瀬戸道路・長久手インターチェンジから約400㍍。そのほか東名阪自動車道、東海環状線などを利用するルートもある。公共交通機関は、名古屋市営地下鉄東山線藤が丘行きに乗車、「藤が丘」でリニモに乗り換え「芸大通駅」で下車。

〈入館料〉大人1千円、シルバー（65歳以上）500円、中高生600円、小学生400円。そのほか団体料金や学校行事料金、年間パスポートなどがある。詳しくはwww.toyota.co.jp/Museum/index-j.html まで。

トヨタ博物館を訪れた時にぜひ見ておきたいのが本館2階にある「ルネ・ラリック　カーマスコット展示室」だ。ルネ・ラリック（1860～1945年）は独自のガラスの世界を創り上げたフランスの工芸家。展示室には1920年代後半を中心に制作した全29種32点のカーマスコットが収められている。

カーマスコットは1910年ごろから30年ぐらいにかけて流行したラジエーターキャップの装飾品。ルネ・ラリックが手がけたのは1925年からのわずか6年間。約4千点もの作品を制作した彼の創作活動の中では異色の作品群だ。それだけに作品数も決して多くはなく、これだけの作品を常設展示しているのは世界でもこの博物館だけと言われている。

東京都庭園美術館（東京都港区）の正面玄関のガラスレリーフ扉と天浴室、大食堂のシャンデリアも彼の作品。こちらも一見の価値はある。

ラリックのカーマスコット

ルネ・ラリック　カーマスコット展示室

カーディーラーの店長に読んでもらいたいドラッカー

第1回「知りながら害をなすな」

大内　一敏

プロフェッショナルの責任は、すでに2500年前、ギリシャの名医ヒポクラテスの誓いのなかに、はっきりと表現されている。「知りながら害をなすな」である。プロたるものは、医者、弁護士、マネジャーのいずれであろうと、顧客に対して、必ず良い結果をもたらすと約束することはできない。最善を尽すことしかできない。しかし、知りながら害をなすことはしないとの約束はしなければならない。顧客となるものが、プロたるものは知りながら害をなすことはないと信じられなければならない。これを信じられなければ何も信じられない。それでいながら、プロたるものは自立性を持たなければならない。顧客によって、支配、監督、指導されてはならない。また、自らの知識と判断が自らの決定となって表れるという意味においては、私的な存在でなければならない。しかし同時に、自らの私的な利害によってではなく、公的な利害によって動くことこそ、彼に与えられる自立性の基礎であり根拠である。（ピーター・ドラッカー著、上田惇生編訳「マネジメント基本と原則」113ページ、ダイヤモンド社）

毎年年末になると漢字検定協会から、その年を象徴する漢字一文字を発表するのが恒例になっている。直近でいうと2010年は「暑」で、夏が猛暑だった。2009年は「新」で、新しく民主党新政権が樹立した。2008年は「変」で、当時大統領候補だったバラク・オバマ氏が「チェンジ・ハズ・カム」「イエス・ウイ・キャン」と連呼していた。

そして、2007年は「偽」であったが、2007年がどのような年だか記憶に残っているだろうか？　その年は、ミートホープの食品偽装や、赤福や白い恋人の賞味期限改ざん、また一度配膳した料理を捨てるのがもったいないからと言って、再加熱し、顧客に出していた船場吉兆のつぶやき女将など記憶にあるだろう。食品を偽装したり、賞味期限を改ざんしたりすることがモラル違反であり、人の道から外れていることくらい誰でも知っているはずだ。まして、高級料亭で人の食い残しを温めなおし、高い金を取るなどもってのほかだ。またこれらのことは民間企業だけではなく公的機関においても同様だ。公務員の空出張、裏金づくり、やみ専従、居酒屋タクシーなど、枚挙にいとまが無い。このようなことをする人々のなかにはマネジャー（管理監督者）も含まれており、皆、知りながら害をなしているのだ。

自動車業界を見ても、業務上横領、書庫飛ばし、車庫証明申請に関わる私文書偽造や公文書偽造、飲酒運転による事故などこのディーラーでも少なからずあるだろう。これらのことは犯罪だ。まして自動車業界に身を置くマネジャー（管理監督者）たるもの、飲酒運転がどれだけ危険な行為か知っているはずだ。

しかし危険な行為と知りながら、悪い行いだと知りながら、悪事に手を染めているのである。『知りながら害をなすな』この言葉は2500年前から、言われ続けているのに未だに是正されていない。マネジャー（管理監督者）には、部下もいる。したがって指導的立場にあり、本来ならば、自分自身を律し、自らが手本となるべき存在だ。ドラッカーの言うように、マネジャー（管理監督者）たる者、知りながら害をなすことはしないと誓いを立てたいものだ。

車中で王様に変身し合唱会場に現れ愛娘を励ます

ピードで走り抜ける4ドアクーペ「メルセデス・ベンツ　CLSクラス」。ハンドルを操る金融プランナーのエヴァン（エディ・マーフィ）は「わるかったー」と車を避けた人々に叫んで謝り、先を急いだ。コメディー映画「エディ・マーフ

ァー（トーマス・ヘイデン・チャーチ）と争うことになり、娘の相手ができない。その状況下、オリビアが空想上の友だちから得た投資の助言を会社の重要資料に落書きする。その内容が大当たりし、エヴァンは娘からさらに情報を

（取材協力＝サン・アールアンドピイ）

スクリーンを飾った名車たち

◁144▷

モータースポーツ開催予定

5月16～29日

◇JAF国内モータースポーツカレンダー　▽20日～22日＝2011年JAF全日本ラリー選手権第3戦HIMUKA RALLY Iin美郷▽21日＝TSR Super Attack Trial in TSUKUBA&Aライ講習会▽21日～22日＝東日本F4選手権第3戦、スーパー耐久シリーズ2011第2戦、JMRC関東コミュニケーションシリーズ長野県ラリーシリーズ第2戦上高地ラリー　2011▽22日＝2011　北海道クラブマンカップレース・シリーズ第1戦、2011JMRC埼群ジムカーナシリーズ第4戦　KSCハイスピードスラローム

◇ネッツ・カップ・ヴィッツ・レース　日本初のナンバー付き車両のワンメークレースとしてスタートした「ネッツ・カップ・ヴィッツ・レース」は12年目を迎えた。国内で最多の参加台数を集めるワンメークレースだが、現在の参加車両になって6年目のシーズンとなった今年も4月から熱戦が繰り広げられている。

5月の大会開催日程は次の通り。▽14、15日もてぎ▽22日十勝▽29日岡山国際

新刊紹介

企業風士とクルマ　歴史検証の試み

桂木洋二著

1911年に日本初の自動車会社「快進自動車工場」が誕生した。ここを起点とすると、日本の自動車産業は一世紀を迎えたことになる。この100年に誕生し現在につながる各メーカーのそれぞれの時代のトップがいかに考え、行動し、企業の方向性を決めたのか、その歴史の中で醸成された企業風士はクルマ作りにどう影響したのかをたどったのが本書である。

日産とトヨタの創業時代を扱った第一章。そして戦後の混乱期、高度成長、オイルショックなどを経て、90年代から現在に至るグローバル化の時代を俯瞰した第八章まで。400㍍近くを費やした労作である。分厚い一冊であるが日本自動車産業の歴史を概観するにはコンパクトにまとめられた通史として最適である。

同時に「歴史とは現在と過去との対話である」（E・H・カー）との観点にたち、自動車メーカー各社の「今」を考えるとき、過去の経営トップの考え、決断そしてその中で形作られてきた企業風士が、現在に連綿とつながっていることが実感できる。「過去を主体的にとらえることなしに未来への展望をたてることはできない」（カー）という意味で一読の価値がある。

（た）

グランプリ出版（☎03－3295－1000）、A5判並製384㌻、定価2940円（税込み）。